

「お母さんを守ってあげてね」と言われて

あらまし

思春期のときの父親と娘の関係は微妙になることがある。何が原因というわけでもないが、娘は父親に反発してしまう。小さい頃と同じような関係を取り戻したいと思っていたときの父親の突然死。残された娘は、夫を亡くした母親の支えになろうと自分の意思を抑えて生きてしまう。そのような生き方の中で苦しくなり、母親にも反発するようになる。そんなとき、母親の働いている姿を見た。その姿に娘の心にも変化が起こる。

はじめに

高校二年生の夏に、最愛の父を亡くしてから気がつけば五年という歳月が流れた。私にとって父を失ったという事実はあるまじりに衝撃的であり、それまでの私の中にあつた何か音が音を立てて崩れ去ってしまった。この五年間、私は自分の中に解決されないままの問題を抱えていた。その心の中の問題に直面することを恐れ、気がつかないふりをしてきた。しかし、ライフヒストリー研究に興味を持ち、学んでいくにつれて、私は自分自身の人生

について考えるようになった。

そこで私は現状に決して満足していない自分、父親の死から心の中に何かを抱え込んでいる自分自身を分析対象にして、今まで避けてきた心の中の問題と向き合ってみたいと思うようになった。この機会に自分の二十二年間を振り返ることで私の中で解決されていない何かについて考えてみたい。

あまりにも突然の父親の死が私に衝撃を与えたのは当然のことだが、その出来事の前後では自分の中で何かが大きく変化した。なぜそれほどまでに衝撃を受けたのかについて考えたとき、過去の父親との関係を振り返ってみることでその理由が少しずつ見えてきた。

十七歳までの悩みのない日々

兄と六歳離れて生まれてきた私は、まるで一人っ子のように可愛がられ、甘やかされて育てられた。特に父親は念願の娘が生まれたことがよほど嬉しかったらしく、目の中に入れても痛くないほど溺愛していた。幼い頃から怒られた記憶は一度もなく、やりたいことは何でもやらせてもらえ、欲しい物は全て買ってもらわれていた。父親は昔から家族に怒った様子などほとんど見せないとても温和な人だった。

母親も温和な人だが、父親が何も言わない分、時には叱り、間違っていることをきちんと教えてくれた。そのような穏やかで愛情に満たされた家庭で育ったおかげか、多少わがままな性格に育ってしまったが、誰とでも仲良くなれ、親を困らせるような

ことは全くなかった。

中学生になり、定期試験で私が夜遅くまで勉強していると、母は私に付き合って一緒に起きていてくれたり、父はいつも私のために差し入れのケーキなどを買ってきてくれたりした。そんなやさしい両親を心の中では本当に大好きだった私だが、思春期のせいか母親とは仲良くしていたが、父親のやさしさを素直に受け入れることができずにうつとうしく感じてしまうことがあり、冷たく当たってしまうことがよくあった。

両親、特に母親は、地元の高校に進学しバンドに夢中になって音楽の専門学校に入学した兄のせいからか、私に一身に期待をかけていた。高校受験にあたって、両親は自分たちの母校でもある三重県北部でトップクラスのA高校進学を望んでいた。しかし、この期待に対して、私は特に嫌悪や不快感を持っていなかった。中学での勉強に困ったこともなく、自然と私はA高校に進学するのだと思うようになっていた。難しいと言われていた名古屋の私立高校も合格したのでそちらに進みたかったが、A高校も合格したため必然的にA高校への入学が決まった。両親の期待通り進学を決めた私だったが、一方で自分のやりたいように自由に生きる兄を心のどこかでうらやましいと思っていた。いつの間にか、親の敷いたレールに乗っかっている自分に気づき始めていた。私にはできない兄の生き方に対する憧れとも言えるその思いは、現在も心の中に存在している。

A高校での勉強は予想以上に大変なものだった。始めのうちは勉強についていくことに精一杯で、あまりのレベルの高さに自

己嫌悪に陥った。A高校では勉強が全てであり、より良い大学に入学することが最終の目標であった。私はそんな学校の方針が大嫌いだった。

しかし、その学校にいる以上勉強はやらざるをえなかった。中学に比べて明らかに勉強量も多く、試験前には夜中まで机に向かっている私の姿を見て、父親は相変わらず差し入れのケーキなどを買ってきてくれたが、あまりに私が辛そうに見えたのか、

「もうそんなに勉強なんかしなくてもいい。勉強なんかしなくても早く結婚すればいい」

と時々言っていた。その頃は、

「何を言ってるの、そんなわけにいかないよ！」
と怒っていたけれども、今考えると、その言葉は口数の少ない父親にとつて精一杯の私へのいたわりの気持ちの表れだったのだろう。高校生になつても、私はそういつた父親のやさしさを素直に受け止めることができなかった。勉強に追われ、余計にいらざることが多かつたせいも、父親にあたってしまうことが度々あった。

私たち家族は、昔から毎年夏休みには家族旅行に行く決まりになっていた。普段あまり外出する機会の少ない私たち家族にとつて年に一度の家族旅行は最大の楽しみだった。今まで国内しか旅行に行かなかつた父親が、高校二年の旅行はグアムに行こうと言いだした。兄の代わりにいとこのSと四人で行くことになった。

旅行に行く前から、私は父親との関係について少し考えていた。父親のことは決して嫌いではなく、むしろ心の中では尊敬していた。それなのにどうしてもいらいらして、あたつてしまう自分がいた。「思春期だから」と思っていたが、父親に対して申し訳ない気持ちでいっぱいだった。去年の旅行先でも父親と喧嘩してしまった。せつかくの旅行でさえ、喧嘩してしまう自分が嫌で、いつまでたつても幼い自分が情けなかった。

グアムでの最初の夜、私はいとこのSと夜遅くまで普段誰にも言つてなかった父親への思いについて、語り合った。やはり両親には感謝しなくてはいけないし、喧嘩ばかりではいけない。「今のうちから親孝行しておかないと、いなくなつてから後悔しても遅い」ということを改めて実感した。そこで私はまずこの旅行で父親と喧嘩しないことを決めた。そして、これから父親ともっと大切にしていこうと決めていた。その夜に決めたせい、第三者のSが一緒だつたおかげか、一度も喧嘩になることもなく、とても楽しい時間を過ごした。あの旅行の楽しそうな父親の笑顔は今でも胸に焼きついている。

この旅行で父親との関係を改めて考え直すことのできた私は、今までの幼すぎた自分に反省し、これから父親と新しい関係を築いていくはずだった。帰国した私は、長旅の疲れからかすぐに眠つてしまった。次の日のことなどまるで知る由もなかった。

突然の死

翌朝、私の人生を大きく左右する出来事が突然起こつた。父

親が突然倒れたのだつた。医者を呼んで注射を打ってもらつたが、しばらくすると容態が急変した。激しくけいれんを始め、何か言っているが聞き取れなかった。その姿はあまりの恐怖で直視できないほどだった。すぐに救急車を呼んだが、その間の五分か十分は私にとって言葉にできない程の長さだった。こわくて病院についていくことができずに、「お父さんが死ぬはずがない」とそればかり考え、現実を受け止められずにいた。

父親はクモ膜下出血と診断され、すぐに手術が行われた。手術には何時間もかかり、とても危険な状態だったがなんとか終了し、ICUに入れられた。手術後の父親は少しだけ回復の兆しを見せていた。しかし、ICUで寝ている父親は頭を坊主にされ、包帯を巻き、体にたくさんの管を通して、以前とは全く違うその姿を直視することがこわくて仕方なかった。嫌な予感が大きくなるだけだった。

お見舞いに来てくださる方々に私はいつも、

「お母さんをしっかり助けてあげてね、支えてあげてね」

と言われていた。そんなことは言われなくてもわかっていた。どうしようもなく落ち込んでいる母親の前で、私は決して涙を見せないようにしていた。「私がしっかりしなければいけない」と幼いながらに一生懸命気を張り詰めてがんばっていた。しかし、ほとんどの人が母親を心配する中、一人が私に言ってくれた。

「お母さんも辛いけど、紀美ちゃんだつてつらいよね、まだ十七歳だもんね」

ずっと母親の前で涙を堪えていたが、その言葉を聞いて涙が

溢れてきた。初めて自分のことをわかってくれた気がして嬉しかったのかも知れない。

しばらくして、父の容態は悪化し、人工呼吸器をつけなければならなくなつた。つまり、父は脳死状態になつたのだつた。そんな状態になつて、未成年だつた私はICUに入ることを許された。久しぶりに父の姿を目の前で見て、涙が溢れてきた。母と共に一生懸命声をかけたが、父の反応はもはやなかつた。それでも私は父の回復を信じていた。

八月十日、父親との別れは突然やつてきた。その日、午前中に病院に行つたが、なぜか夕方もう一度来ることにして、昼前にいったん自宅に戻つた。母に頼まれた家の用ことをしていると、家の電話が突然鳴つた。それは兄からの父の死を告げる電話だつた。私は多分「本当に？ 本当に」と間違ひであることを祈るかのやうに何度も聞いていた。頭の中が真っ白になつていた。本当なら病院に行かなければならないのに、行くことができなかった。

しばらく椅子に座り込み呆然として、涙も出てこなかつた。病院には行けなかつたのではなく行かなかつたのだと思う。決して動くことのない父の姿、泣き崩れている母の姿を見るのがこわかつた。それでも私は「母の代わりに私はしっかりしなくてはいけない」という思いだけで家のことをしていた。その思いだけが私を働かせていた。

父親が棺桶に入れられて戻ってきてからも、私は決して母の前で涙は見せないやうにしていた。母の言葉に表せないほどに悲

しみ泣いている姿を見て、「私は落ち込んでいる場合ではない」と思つていた。悲しみに耐えられなくなると自分の部屋に行き、一人で泣いていた。お葬式の間も、泣いている母の隣で私は必死に涙を堪えていた。泣いている暇はない自分自身にそう言い聞かせていた。自分から忙しく働くことでなく余裕を与えないやうにしていた。それでも親友のMが涙を流してくれている姿を見たとき、高校の男友達が手紙を渡してくれたとき、思わず涙が溢れてきた。

父の死を実感したのは、お葬式が終わり、静まり返つた家に母と兄と私の三人だけになつてからだつた。私が幼い頃は七人が暮らしていたこの家は、三人ではあまりに広く感じられた。結婚してからずっと専業主婦をしていた母は、それから一年ほどは仕事を始める元氣もなく家にいた。そんな母を側で見て、「やっぱり母の前では泣いてはいけない、一番辛いのは母なのだから」といつも自分に言い聞かせていた。

母を守るのは私だ

父を亡くして私は、何かとても大きな支えを失つたように思えた。生きていた時には特別に感じていなかったが、やはり父は私にとってかけがえのない存在であり、私の大きな心の支えであつたことに気がついた。心の支えがなくなつたと気づいたとき、これからの自分は今までと同じではいけないと思つた。しかし、まだ若干十七歳の私にその答えが見つけれられるわけがなかつた。それまでは何も考えずに、ただ生きてきた私であつたが、父の死

をきつかけに、「私はどうしたらいいのか。何を第一に考えていけばいいのか。自分を第一に？ それとも母を第一に」という疑問が頭から離れなくなっていた。しかし、父がいなくなつた今、「母を守るのは私だ」と思っていた。父にこれから親孝行していくはずだったのに何もしてあげられなかつたことに対して、後悔は募るばかりだった。「その分もこれから先、できる限り母を守っていくことが、母に対しても、また父に対しても私ができる唯一の親孝行だ」と思っていた。私は無意識のうちに母を第一に考えるようになっていた。それが母にも私にも一番いいことであると考えていた。

父がいなくなつてからの高校生活もたくさんの友人に支えられ、楽しく過ごすことができた。みんなが以前通り接してくれることが、私にとっては嬉しかった。授業や定期テストもそれなりにこなしていった。しかし、私が勉強をする理由は、「悪い成績を取ったら母が悲しむ」という思いだけだった。それなりに勉強をして、いい成績を取れば母が安心する。「もうこれ以上母を悲しませたくない」という思いが私に勉強をする力を与えていた。進学校であるA高校に入学した私は、大学も行くものだと思っていた。

しかし、「父がない今、就職をした方がいいのではないか」と考え始めた。大学で特別に学びたいことがあるわけでもなかつたので、それで母を支えられるなら、と思っていた。ある日そのことを母に話してみると、母は私の大学進学を望んでいた。母にとつては、私を大学に進学させることが、親としてのプライド

だったのかもしれない。

私は母の望むまま、進学をすることを決め、予備校にも通つた。学校もすっかり受験一色といった様子になり、周りのムードに流されて、私もそれなりに受験への意識を高めて勉強をしていた。しかし、母と離れて暮らすことはできないと思つた私は、行きたかつた東京の大学を諦め、地元の大学進学を決めていた。夏休みが終わると、友達が指定校推薦の話を持ちかけてきた。A高校には地元の大学以外にもたくさんの大学の推薦枠が用意されていた。私の行きたかつた東京の大学も内申が足りていたが、諦めるしかないと思ひ、地元の大学を幾つかピックアップして母に話した。

「B大学なら名前も通っているし、それで決まるんならいいんじゃない」

と言われ、私も、「B大学ならいい」と思っていたので、その意思を先生に伝えた。学内選考も通り、受験して合格し、一足早く大学受験を終えた。大学受験を逃げたと言えばそうなのかもしれない。友達にも、

「おまえはあほや。ちゃんと受験すればもつといい大学絶対受かるのに、もつたいない」

とよく言われた。しかし、私はこの選択には決して後悔してはなかつた。指定校で決めることで母を安心させることができたし、何より勉強ばかりの高校生活にうんざりしていた私は少しでも早くここから抜け出したいと思つていた。勉強が全てだった高校の制度が嫌いだった私にとつて、大学が決まってから自由な

日々が楽しくてたまらなかつた。

母も父が亡くなつて一年程たつてようやく元氣を取り戻したようで、地元の役場で仕事を始めた。久しぶりの仕事で、家事との両立が大変そうだったが、家でじつとしてゐるよりも人と接している母の方が、以前よりも元氣に見えて私はほつとしていた。ずつとフリーターをしていた兄もまた、私たちがイタリアに旅行に行っている間に一人で会社を決めて働き始め、やつと我が家も一段落したといった感じだつた。

大学生活がスタートしたが、思っていた程甘いものではなかつた。大学が決まつてから全く英語の勉強をせず遊んでいたため、授業についていくのが精一杯だつた。高校までそれなりに勉強してきた私は、正直言つて大学に勉強を求めていなかった。それなのに毎日一限から四限まで授業を受け、毎日宿題を出されるという生活は苦痛以外の何ものでもなく、高校時代と何も変わらないことに愕然とした。大学に行つてまでも、ただ毎日与えられた課題や宿題をこなしていくだけの勉強はあまりにも期待はずれであつた。

前期が終わる頃には大学で学ぶ意味を見失い、心の中では大学をやめることを真剣に考え始めていた。「こんなたくさんのお金を払い、いやいや勉強して何の意味があるのか。それなら学校をやめて働いた方がよっぽどましだ」という思いに駆られ、全てが無意味に思っていた。初めて心の中で考えているこの思いを泣きながら母にぶつけた。

「お願いだからそんなこと言わないで、大学だけはちゃんと卒

業して」

と言つて母はどこかに行つてしまつた。しばらくして、私は仏壇の前で泣いている母の姿を見つけた。そんな母の姿を見て、私はどうしようもなく悲しくなつた。父が亡くなつてから、母を悲しませるようなことは決してしないと誓つたはずなのに、いつの間にか自分のことで精一杯になつて、母を思いやる気持ちを忘れていた。勉強に対するイライラなどをいつの間にか母にぶつけるようになっていたことに気づいた。「これ以上母を悲しませてはいけない」と思つたとき、私は母に謝るしかなかつた。仏壇の前で泣いている母の側で泣きながら謝り、大学を辞めることを断念した。「四年間大学に通い卒業することで、母が喜ぶならそれでいい」と思つた。結局、私は母の思いを選んだ。私の人生でありながら、母を大切に思うあまり、自分の意思をつき通しやりたいことをやるという生き方をできないでいた。そんな自分がすごく嫌だったが、それは私の中で「仕方がない」という言葉で抑えられていた。

それからも相変わらず学校に対して何の思いもないままに毎日通つていた。英語に対する興味も薄れ、学ぼうという意思失われて、ただ学校に行つてゐるといふだけだつた。母と喧嘩したときに、「卒業する代わりに四年間は自由にしてもいい」と約束したので、友達と夜遅くまで遊んでも、母は何も言わなかつた。それでも思うままに遊びきれない私がいた。兄はほとんど家で夕食を食べなかつたため、私が家にいなければ母は一人で夕飯を食へ、夜を過ごすさなければならなかつた。寂しがり屋の母の性

格を知っているため、母を一人にしてしまうことは遊んでいるときでも気にかかり、胸が痛くなった。

父がいない今、母の仕事の話や愚痴を聞いてあげられるのは私しかないし、私がしなければならぬと思っていた。友達と同じように騒いで遊んでいるけれど、私の心は、誰にも話さなかつたけれど、重い鎖でつながれている様だった。「仕方がない」と思いつつも、普通の二十歳の人よりも家族のことを考えなければならぬ自分の置かれている状況が時々とても嫌になっていた。

母は仕事を始めて三年目で福祉課に移動した。毎日高齢者を相手に体力を使う仕事に慣れるまでは、本当に辛そうだった。そのうえ家の仕事もこなさなければならず、毎日とても疲れていた。そんな母の姿を見ながらも、私は家のことをあまり手伝えずにいた。「やらなければいけない」と思いつつも、幼い頃から甘やかされていたせいか、料理や掃除など家のことをほとんどしてこなかったで何をしたらいいのかわからなかった。

しかし、母の仕事先でのボランティアが私を変えろ大きなきつかけとなった。今までの自分ではいけないと思い、また母の働く姿を見れば自分の中で何かが変わるかもしれないと始めた、高齢者介護のボランティアは予想以上に大変だった。母の仕事はボランティアの私よりも格段に大変そうだったが、どんなに忙しくても高齢者の方に笑顔で接していた。汗をかきながら一生懸命働く母の姿を初めて見て、改めて母を尊敬した一方で、今まで自分が大した手伝いをしてこなかった自分を恥ずかしく思っ

た。母の働く姿をこの目で見て、私の心の中で確実に何かが変わった。

それからは家の中のちょっとしたことでも母の代わりにするようになった。たとえどんな些細なことでも母の負担は軽くなるし、何よりも母が喜んでくれるのが嬉しかった。また、母と同じ職場で働いたことよって仕事の話を理解でき、以前よりも興味を持つて聞けるようになった。

母に対する考え方も変化した。これまでは「私が母を支えなければならぬ」と思い、心のどこかでずつと負担になってしまっていた。しかし、それは考えすぎであることに気がついた。がんばっているのも辛いのも、私だけではなかったのだ。母の働く姿を見てからは、私が母の全てを支えることはできないけれど、母の負担が少しでも軽くなるようにしよう。母とできるだけ一緒に過ごし、話をするることによって、母の心が少しでも晴れるように、「一緒にがんばつていこう」と思えるようになった。私にできることは大したことではないけれど、少しずつでも母を支えていきたいと思つている。

変化した私

この機会に自分史を作成し、今まで自分が抱え込んできたものと向かい合うことよって、それがいったい何であったのか少しずつ見えてきたような気がする。幼い頃から両親の愛情を一身に受け、何の不自由もなく生活してきた。思い切り甘やかされ、怒られたことなどなく、何の不安を感じることもなく生きてき

た。運動神経にも学習能力にもそれなりに恵まれ、素晴らしい友人にも恵まれ、挫折など経験したこともなかった。

しかし、高校二年の夏、私は人生最大の挫折を経験した。それは父親の突然死という出来事だった。当時十七歳の私にはあまりにも衝撃が大きすぎ、そのときから大きな心の支えを失ってしまった。そして知らず知らずに心の中にとても大きな負担を抱え込んでいた。それは母を守らなければならぬという思いだった。父を失ってから私はいつでもどこかで自分を抑えざるをえなかった。いつも、家のこと、母のことを考えざるをえなかった。自分にとって何を第一に考えるべきなのか？ その答えはいつまでたつても見つけることができなかった。その問いを口にすることは決してなかったが、心のどこかにいつも引つかかっていた。

結局、私は現在に至るまで、親の敷いたレールの上を歩いてきたようにしか思えなかった。いつも「何にも縛られずに自由に生きたい」と思っているにもかかわらず、自由になれない自分に苛立ちさえ感じていた。

しかし、最近になつて私の考えは変わりつつある。私はいつの間にか、自分ひとりで問題を抱え込んでいるような気になつてしまい、自分だけが辛い思いをしていると思ひ込んでいたけれども、母の働く姿を見て、がんばっているのは私一人ではなく、何も一人で抱え込む必要はないということに気がついた。今は、最後まで私に愛情を注いでくれた父親に感謝し、また父が亡くなつてから女手ひとつで育ててくれている母に本当に感謝している。これからは少しずつでも母の支えになるように努力し、なるべく

母との時間を作ることによつて、父がいない今、少しでも母が寂しく思う時間を減らしてあげたいと思えるようになった。

今まではこういった思いを義務のように感じ、負担を感じてしまつていたが、最近はこのように親のことを考える自分を「縛られている」とは思わなくなった。むしろ、他の人より両親に感謝の気持ちを持って、早く親孝行ができるということとは素晴らしいことなのではないかと思えるようになった。